

専門演習における地域と連携した取り組み

—宮代町里山自然活動を中心として—

The efforts on community-university collaboration of seminar class
for The Miyashiro-machi Satoyama-nature-activities

小林 田鶴子・田中 卓也

Tazuko KOBAYASHI・Takuya TANAKA

概要

共栄大学教育学部では、3年から専門演習の授業が始まるが、これは卒業論文作成とそれに関わる活動である。その専門演習での活動で、埼玉県宮代町と連携した小学生対象の里山自然活動を行った。本稿では、まず宮代町職員へのアンケートから連携の経緯を示し、2回の活動の概要や内容を報告する。そして、参加学生のアンケートや感想文から、こうした活動が専門演習にもたらす意義を考える。

キーワード：専門演習、地域連携、自然活動

Abstract

In Faculty of Education, Kyoei University, the two-year seminar class for graduation thesis starts from the third year. Kyoei University is located close to Miyashiro-machi, Saitama. As one of seminar class projects, Satoyama-nature-activities for elementary school children in Miyashiro-machi were held by Miyashiro-machi and university students in August 2014 and July 2015. In this paper, the history of cooperation was examined by the questionnaire answered Miyashiro-machi staff. Then we report general structure and contents of twice-held Satoyama-nature-activities. Finally from impressions of participating students appeared in their questionnaire, we discussed the meanings of community-university collaborations for university students.

Keywords: Seminar classes, collaboration with a local community, Nature activities

目次

1. はじめに (小林田鶴子)
 - 1.1. 研究の目的
 - 1.2. 教育学部における専門演習
 - 1.3. 研究対象と研究方法
2. 本活動に至る経緯 (田中卓也)
 - 2.1. 宮代町の状況
 - 2.2. 地域と連携した事業への参加
3. 活動の概要 (小林田鶴子)
 - 3.1. 2014 年 (平成 26 年) 度の活動
 - 3.2. 2015 年 (平成 27 年) 度の活動
 - 3.3. 参加学生の感想
 - 3.4. 活動からの学び
4. 専門演習における地域連携活動の意義と今後の課題 (小林田鶴子・田中卓也)
5. おわりに (小林田鶴子)

1. はじめに

小 林 田 鶴 子

1.1. 研究の目的

本研究の目的は、専門演習における地域と連携した活動について、その意義と位置づけ、および専門演習における学生の学びについて、検討することにある。

1.2. 教育学部における専門演習

共栄大学教育学部では、3 年次から専門演習が始まるが、これは卒業論文作成とそれに関わる活動であり、いわゆる専門ゼミという位置付けである。

専門演習の目的は次のように書かれている。(専門演習要項 2014.5.6 より)

- (1) 専門領域の学芸を深め、探究・考察する力を育成する。
- (2) 卒業論文を中心に、論文の書き方や探究のしかたについて学ぶ。
- (3) 大学時代の学習・研究で培った知識と力量を総動員して、実際にテーマを定め、研究を行い、論文にまとめる。

3 年次は、(1) と (2) (3) を適宜組み合わせて専門演習を構成する。

目的 (1) に掲げられている演習内容は、学書講読などのデスクワークと、実践的な活動が挙げられるが、本研究では後者の実践的な活動に焦点を当てている。なお、本学の教

教育学部発足が2011年だったため、専門演習が開始されたのは、2013年からである。(本稿では、専門演習を履修している学生をゼミ生と記し、専門演習の授業をゼミと記す。)

1.3. 研究対象と研究方法

研究対象は、専門演習の授業の一環として行った宮代町里山自然活動と学生の状況である。なお、活動は小林田鶴子ゼミと田中卓也ゼミの合同で行っている。

研究方法は、里山自然活動を企画している、宮代町教育委員会の担当者へのインタビューと、小林田鶴子ゼミと田中卓也ゼミ生へのアンケート、感想文で考察を行う。

2. 本活動に至る経緯

田 中 卓 也

2.1. 宮代町の状況

まず、里山自然体験活動を行うことになった「宮代町」のことについて紹介しておきたい。宮代町は埼玉県東部（南埼玉郡）の中央に位置し、南北に縦長の町域を有している。町の面積はおよそ15km²。人口は34,000人ほどである（2015年10月1日現在）。交通では、東武鉄道伊勢崎線が町西部に沿って走り、東武日光線が町内の「東武動物公園駅」を起点として栃木、日光方面へと走っている。また町の中央部には東武動物公園や日本工業大学が存在する。

宮代町に隣接している市町村には、白岡市、久喜市、杉戸町、春日部市がある。本学は春日部市に位置する大学であるため、春日部市と宮代町が近接領域となっている。

本学と宮代町は2011（平成23）年2月に包括協定を締結している。協定の趣旨は「宮代町と隣接する共栄大学とは、これまで様々な分野でまちづくりの連携を進めてきました。そこで、地元の文科系大学として今後もこれから地域課題の解決やまちづくりに多様な可能性を求めて相互の密接な連携を進めていくため」のものであった¹⁾。なお、包括協定については、『広報みやしろ』のおいても、以下のように報じられた²⁾。

- ▼12月22日（木）宮代町と共栄大学（春日部市）との連携に関する包括協定の締結式が行われました。宮代町と共栄大学とはこれまで、指定管理者候補者選定委員会や総合計画審議会の委員派遣、まちづくりセミナーの講師派遣などにおいて連携をはかってきましたが、この度、より広い範囲における分野で連携を深めるため、包括協定を締結することとなりました。▼厳粛な雰囲気で行われた庄司町長と山田学長との調印後は、最近の学生の様子や町の話、これからの連携について和やかな懇談が行われました。
- ▼今後は、地域の安心安全や地域資源を活用した産業振興、学校教育支援、人材の育成などの様々な分野での連携が進んでいきます。

以来、本学と宮代町(役場)は、「地域の文化系大学」という形で学生派遣(ボランティア活動)などの交流をしていくことになった。

本学と宮代町の連携事業にはどのようなものがあったのか。以下に示してみたい³⁾「電脳みやしろ」(2011年12月22日)。

連携事業

1. 地域の安心・安全の推進
2. 地域資源を活用した経済・産業・観光の振興
3. 地域振興・まちづくり
4. 学校教育支援
5. 健康増進
6. 芸術文化・スポーツの振興
7. 人材の育成

以上の項目について、地域の課題に迅速かつ適切に対応し、活力のある個性豊かな地域社会づくりを目的として、連携を図っていくことについて合意しました。

連携事業の内容は多岐にわたっている。「2」、「3」についてはとくに本学国際経営学部が、「4」、「6」、「7」については本学教育学部が主に担当している。「4」については、「子どもの居場所プロジェクト」(不登校児童との交流活動ボランティアとして、2015年9月～)、「宮代町、共栄大学、日本工業大学三者連携事業 地図作りプロジェクト」(宮代町観光マップ作成をもとに、町内教育施設の調査、地図作り補助作業員として、2015年9月～)、「子育てmapプロジェクト」(子育て支援事業として、2015年9月～)、「子どもの学習支援」(不登校児童や勉強の不得意な児童を中心に指導する学習支援員として、2013年4月～)であり、「6」については、「輪e和eプロジェクト」(おもに児童との交流活動を中心とした企画運営委員として、2014年9月～)、「宮代町民腕相撲大会」(審判、応援キャラクターとしてのボランティアとして、2013年3月～)「宮代町内小学校児童かるた大会」(審判員として、2015年6月～)、「トウブコフェスティバル」(地域の商工業者等との連携として、2015年9月～)、などがそれである。おもには執筆者主宰のゼミ(3、4年生ゼミ学生)、現在の教育学部2年生の有志ボランティアがその活動の担い手である。上述したプロジェクトが行えるようになったのは、2011年12月の包括協定が基盤になっているからにはかならない。協定締結から約4年が経過するが、連携事業に関わる者のひとりとして、年々本学と宮代町との連携がより強くなっているのを肌で感じる人が多い。

また「4」については、2015年4月より本学教育学部1期生が臨時的任用教員として2名、宮代町内の公立小学校(宮代町立笠原小学校、宮代町立東小学校)に勤務しているこ

とも挙げられる。本学教育学部1期生は、東日本大震災後の2011年4月に入学し、2015年3月に卒業した32名である。執筆者のゼミに属した2名の学生は、大学4年時の専門演習でまさに里山自然体験活動を経験した学生である。里山活動を通して宮代町との関係はより深くなり、自らの仕事場としながら、日々一生懸命職務に従事していることを思うと、感慨深いのである。

2.2. 地域と連携した事業への参加

宮代町は地域と連携した取り組みを行うようになったのか。調べてみる必要がある。そこで執筆者は、宮代町教育委員会生涯教育課の職員の主査である小林知弘（こばやし・ともひろ）氏にご協力いただき、質問紙によるアンケート調査を2015年10月末頃に実施した。そこでの回答をもとに、宮代町が取り組んできたのかについて見ていきたい。なおアンケート紙の考案・作成については共同執筆者の小林田鶴子先生と執筆者の田中がともに行っている。

まずは、宮代町（教育委員会）で「自然体験活動」を行うきっかけとはどんなことでしたか？ という質問について、小林氏は次のように回答している。

宮代町の教育の重点施策に「青少年の体験活動の推進」が掲げられており、その具体策として自然体験活動が行われています。なお、自然体験の分野に限る必要はないため、過去には、ドミノ倒しや手作り望遠鏡による星空観察会など、様々な事業が行われています。自然体験活動としては、宮代町青少年相談員という、主に20代の若者（大学生・社会人）で組織されたボランティアグループが中心となって、水遊びやオリエンテーリング、アウトドアクッキングなどを実施していました。

宮代町の教育の重点施策に「青少年の体験活動の推進」が掲げられていたことがきっかけとなっていることがうかがえる。それは「自然体験の分野に限る必要はないため、過去には、ドミノ倒しや手作り望遠鏡による星空観察会など、様々な事業が行われています」とあるように、あまり大がかりではない事業がその基礎となっていることがわかる。さらに自然体験活動は「宮代町青少年相談員という、主に20代の若者で組織されたボランティアグループが中心」となっていたようであり、町の業務に携わる若者が担当していたことがわかる。

「当初、自然体験活動を行うことに、宮代町（教育委員会）の方々はどのようなご意見をお持ちだったのでしょうか？（賛成・反対もふくめて。当時の状況がわかれば）」という質問については、小林氏は以下のように回答している。

教育委員会の方針に沿って実施される、町の環境資源を活かした企画として評価され、組織内での異論はありませんでした

教育委員会の方針に従う形で行われることで、とくに異論無く実施されることにあったようである。すなわち若者が中心となって行う企画に共感的であったことをうかがわせる。

また『『自然体験活動』を行ううえで、ご協力ご支援をいただいた団体（個人など）には、どのようなものがございましたか？（チラシ等の資料があれば添付可）またその団体（個人）がどのように関わって下さいましたか？ できるだけ具体的にお書き下さい。』との質問について、小林氏はつぎのように回答している。

既述の宮代町青少年相談員の協力のもと実施していました。具体的には、教育委員会で作成した企画案をもとに、青少年相談員メンバーが自主的に役割分担し、当日の運営を教育委員会と連携して実施しました。その中で、青少年相談員は主に子ども達の世話役となり、安全面と作業の遅れや失敗のフォローなどを担当。活動全般をサポートするお兄さん、お姉さんとして活躍していただきました。

教育委員会との連携の上、青少年相談員が「主に子ども達の世話役となり、安全面と作業の遅れや失敗のフォローなどを担当。活動全般をサポートするお兄さん、お姉さんとして活躍」したとあるように、教育委員会と青少年相談員との結びつきが強かったことがわかる。教育委員会のほかに支援するメンバーが確立していたことがわかる。

では、宮代町ではどのような取り組みを行ってきたのであろうか。以下に見てみたい。

- 『アウトドアキッチン』（2014年8月19日<日> 10:00～15:00 於：ふれ愛センターみやしろ）青少年相談員の方の支援協力あり

ふれ愛センター屋外（西原自然の森）にて、カレー作りに挑戦。小学4～6年生9名が参加。かまども手づくりして、自然の中でのクッキングを楽しみました。

- 『冒険遊び場 Bamboo！』（2015年8月18日<日> 10:00～15:00 於：ふれ愛センターみやしろ）青少相談員の方の支援協力あり

ふれ愛センター屋外（西原自然の森）にて、竹を使った夏の自然遊びに挑戦。小学生33名が参加。竹の水鉄砲を手作りして「的当て」で遊んだり、お昼ご飯は竹の流しそうめん、おやつは竹を使ったバウムクーヘンをみんなで作ったり、一日、自然活動を

楽しみました。

『アウトドアキッチン』、『冒険遊び場 **Bamboo**』の2回が行われていることがわかる。いずれも自然活動の一環として行われ、教育委員会が中心となりながら、青少年指導員がこれを支援協力している形態を採用している。次年度（2014年）からは、田中ゼミおよび小林田鶴子ゼミの学生が参加することになり、「あそべんちゃーわーど」という名称で里山自然体験活動を行うことになるは、本学学生はまさに「青少年指導員」の方々の役割を任されていることになる。このような責任のある役割を与えられた本学学生らは、意義を感じながら、責任をもって活動に従事しなければならない。もはや彼等は「ボランティア学生」ではなく、「活動支援員」ひいては「企画運営委員」としての重職を全うすることが求められているのである。今後もこの活動は続いていくと思われるが、本学学生に宮代町教育委員会が信頼を置いていることがわかる。このようなチャンスはしっかり活かしていかなければならないであろう。

さらに小林氏は次のように述べている。

他者とのコミュニケーションを形成しながら、自然に親しみ、学校や日常生活では経験しにくい遊びや学習などの体験をすること。それによって、創造（想像）力、自主性、協調性などを醸成する。郷土を知り、郷土への愛着を醸成すること

現代の子どもらが苦手としている「他者とのコミュニケーションを形成しながら、自然に親しみ、学校や日常生活では経験しにくい遊びや学習などの体験をすること。それによって、創造（想像）力、自主性、協調性などを醸成する」ことを願っている。また宮代町を支える将来の一人間として「郷土を知り、郷土への愛着を醸成すること」についても附言されている。

かくして宮代町は次世代の子どもたちを育成していくことを肝に銘じている。町の至宝である「子ども」たちをしっかりと認識しているのである。

最後に「この「自然体験活動」を通じて、その後の宮代町の教育にどのような影響をもたらしましたか？」という質問について、小林氏は以下のように回答している。

- ・教育委員会主催の子ども向け事業の評価が向上したように感じます。事業の評判が、保護者や子ども達の間で口コミで広まるなどし、一定数の参加者が安定して確保されるようになってきました。

- ・子どもたちが郷土の自然、人、文化などに目を向け、愛着を醸成する場として、内外から一定の役割を期待されています。

児童だけでなく、児童の保護者等が大きく信頼を寄せていることがうかがえる。「保護者や子ども達の口コミで広まるなどし、一定数の参加者が安定して確保されるようになっていきます」と述べていることから、地域住民の信頼を勝ち取ることに成功したことが大きな要因となっており、ますます宮代町の児童育成に力を注いでいる。

このことが、現在行っている里山自然体験活動に宮代町児童を巻き込んで実施できるようになった背景となっている。このような良い雰囲気を壊すことなく、次代の学生らによって新たな里山体験活動が生み出されることになるのである。

3. 活動の概要

小林 田鶴子

3.1. 2014年(平成26年)度の活動

前項のような経緯を経て、2014年8月に宮代町教育委員会との連携で第1回「里山体験事業」が開催された。その活動概要を以下に掲げる。また、実施内容の具体的な部分については、小林ゼミが担当した内容を示す。

活動名称：「里山を通した自然体験活動」(あそべんちゃーわーど)

活動日時：2015年7月25日(土)9:00～14:00(後片付けなどの時間も含む)

活動場所：新しい村・山崎山(埼玉県南埼玉郡宮代町字山崎764)

山崎山(チームワークラリー)

新しい村・広場(楽器づくり、おもちゃ作り)

山崎山集会所(流しそうめん)

協力団体：さいたま緑のトラスト協会宮代支部

活動の目的：①子どもの主体的な集団活動による社会性の育成

②自然体験、創作体験を通した情操教育

③達成感を通した自尊感情の育成

④身近にある自然や人々とのふれあい、郷土に対する愛着心の育成

活動内容：①あいさつ、諸注意(実行委員長・田中ゼミ生、宮代町教育委員会・小林和弘)

②山崎山のお話(さいたま緑のトラスト協会宮代支部代表・八木橋孝雄)

③チームワークラリー(山崎山の中を散策)

④手作り楽器づくり(宮代町で育った竹を使った太鼓の製作)・おもちゃ作り

⑤流しそうめん（宮代町の竹を切って利用）

参加学生：共栄大学教育学部（田中ゼミ4年5名、3年5名、小林ゼミ4年1名、有志学生1名）

計：12名 引率および総括責任者：田中卓也、小林田鶴子（2名）

関係者：宮代町教育委員会教育推進課職員：小林知弘、榎井恵未（2名）

参加児童：宮代町内在住の小学生30名

活動の具体的な内容について、小林ゼミが主に担当した「④手作り楽器づくり」の内容を次に記す。

まず、「手作り楽器づくり」のウォームアップとして、「チームワークラリー」の中でワークシートを用いて周りの音に耳を澄ませる体験を行った。次に、予め枝を切り落としてある5~6メートルの竹を鋸で切って、竹太鼓の制作を行った。制作時間は30~40分だった。竹太鼓を作ることにした理由は、単純な構造の奏法が簡単であることと、紐で首からぶら下げることによって身体に密着し、叩いた時に竹の響きを身体で感じることができるという理由であることを、ゼミ生が挙げている。また、マレットには切り落とした竹の枝を使い、枝のどの部分を使うかによって、音が変わることも発見してもらうようにした。そして、それぞれ、自分の竹楽器を作ったら、最後はアニメーションのテーマソングに合わせて、ゼミ生の指示によって「合奏」を行った。



写真1 竹を切る様子



写真2 竹太鼓でリズムを合わせて演奏する様子

3.2. 2015年（平成27年）度の活動

2015年度には第2回の里山自然活動が実施されたが、この概要も以下に示す。

活動名称：「里山を通した自然体験活動」（あそべんちゃーわーど）

活動日時：2015年7月25日（土）9:00～14:00（後片付けなどの時間も含む）

活動場所：新しい村・山崎山一帯（埼玉県南埼玉郡宮代町字山崎764）

協力団体：さいたま緑のトラスト協会宮代支部

活動の目的：①子どもの主体的な集団活動による社会性の育成

②自然体験、創作体験を通じた情操教育

③達成感を通じた自尊感情の育成

④身近にある自然や人々とのふれあい、郷土に対する愛着心の育成

活動内容：①あいさつ・諸注意（実行委員長：田中ゼミ生、宮代町挙行く委員会 小林和弘）

②山崎山のお話（さいたま緑のトラスト協会宮代支部代表・八木橋孝雄）

③チームワークラリー（山崎山の中を散策）伝承あそび等

④手作り楽器づくり（山崎山の自然の材料を使った5種類の楽器の製作）

⑤流しそうめん（宮代町の竹を切って利用）

参加学生：共栄大学教育学部（田中卓ゼミ25名、小林ゼミ6名、有志学生10名）

計：41名 引率および総括責任者：田中卓也、小林田鶴子（2名）

関係者：宮代町教育委員会 生涯学習担当職員：小林知弘、田中啓之（2名）

参加児童：宮代町内公立小学校児童40名

活動の概要は平成26年度と同様であるが、その中身は変更されている。募集人数も前回申し込んで参加者に選ばれなかった児童が多かったため、40名に増やした。小林ゼミが携わった④手作り楽器づくりのプログラムにおいても、楽器の数を前回の竹太鼓に加えて、パンフルート、ギロ、シェイカー、キューカーの5種類を増やした。参加人数も増え、ゼミ生の数も増えたため、各楽器担当を決め、各楽器を作るコーナーを設けて、どの子も最低1個は楽器を完成させられるようにスケジュールを組んだ。また、手作り楽器での合奏も、1回目のように既成の曲に合わせるのではなく、パートごとに決めておいたりリズムパターンを組み合わせたたり、その場で子どもたちが即興的にリズムを作り出したたりする創作的な活動を盛り込んだ。

3.3. 参加学生の感想

参加学生の振り返りについては、1回目は事後の感想文、2回目は事前アンケートと事後の感想文を書かせた。以下にその内容の一部を示す。

そこから、この活動が学生にとってどういう意味があったのか、またそれが専門演習にどう生かされるのかを考察する。

第1回目（2014年8月実施）の感想文から（学年は当時の学年）

- ・今までこのようなことをやったことがなかったことへの不安な気持ちとやったことがないことでわくわくするような楽しみな気持ちと半々でした。(中略) それを達成した

ときの嬉しさ、達成感はやってみないと分からないもの、あじわえないものだと思います。(4年男子)

- ・今回の活動の様子を見ていると、子ども達は協力しあいながら様々なことを行うことができるのだということを実感(中略)今回のイベントの目標でもある、社会性を養うためには、子ども達が自主的に他者に関わっていかなければならないかと私は考えます。(4年女子)
- ・今回の計画は、企画から携われるというとても貴重な経験でした。大学生活を通して実際の小学生を対象としてのイベント・協力団体との連携は初めてだったので、学んだこと・反省点を多々見つけることができました。学んだことは、まず企画段階での話し合いの重要性です。(中略)反省点は、企画をもっと具体的で細かく考えなければならなかったことです。(4年男子)
- ・私は、里山での活動は今回が初めてでした、里山というものがどんなものかということも知りませんでしたし、児童と自然の中で関わるということも初めてでした。(中略)物がなんでも揃う豊かな時代に生まれてきた児童が、何かを創ったり、誰かと一緒に協力して活動したり、自然環境について考えることのできる里山活動は、とても重要なのだと考えさせられました。今回学んだことが、私達は近い将来、教員になった時に発揮できるだろうし、児童たちも時間を経て環境について考えたり、物を作ったり、未来につながる行き方の土台になるのだということ学びました(3年女子)

第2回目(2015年7月実施)の感想文から

- ・私は、今回が初めての参加で不安が多かったのですが、大成功に終わったのは4年生の先輩方のお力があったからだと思います。(中略)私のいたチームはまず竹楽器を作って演奏しました。楽器を作っている子どもたちの集中力に驚きました。作り終って「できた!」と自慢してくるあの笑顔は忘れられません。どの子も自分が作ったものだと楽器に愛着を持っており、移動の際に大事に持っている姿が印象的です。演奏会では、楽器ごとに分かれてそれぞれのリズムで演奏を合わせました。静かな空間の中に竹楽器の音が響きとても感動しました。(3年女子)
- ・私は里山活動のポスター作成に参加させていただきましたが、そのポスターも子どもたちに好評で、またポスター書いてくれたら参加するねと言われました。その時は本当にうれしくて、初めて自分の功績が認められたような気がしました。(3年女子)
- ・竹楽器の作業では、私が思っていた以上に子どもたちの持っている力が強くほとんど補助なくどの子も作ることができていて、感動しました。(中略)2組目の時、先輩がアイデアを出してくださりそれを実践したところ、自分が作った楽器の音を叩き、聴き、楽しんでいる子どもの姿を見ることができました。当日の急な変更にも臨機応変に対応することができ、皆で協力するとだいたいのはできてしまうんだと感動

しました。(3年女子)

3.4. 活動からの学び

参加学生の感想の視点は、大きく次の4つに分かれる。

- (1) 本活動に企画段階から参加したことや、自分の役割
- (2) 参加した子どもへの対応と子どもの様子
- (3) 「里山自然体験」という内容そのものの意味
- (4) ゼミ内での協力態勢（特に先輩と後輩の関係）

(1) については、学生は企画段階から関わることへの不安があったものの、実際にやってみることで達成感を得たことがうかがわれるし、自分の役割についても、同様に達成感を得ることができた様子が示されている。(2) については、子どもたちの力は自分たちが思っていた以上のものだということを実感したこと、子どもたちの喜んでいる姿が自分たちの励みとなったことがうかがわれる。(3) は、大学内では学べない、まさに地域に繰り出して行くことで体験でき、新たな発見につながり、将来教員になった時にこの経験が活かせることを示唆している。(4) については、先輩後輩が助け合うことでうまくいった例や、2つのゼミが協力して行うことで、解決できることを実感した姿がうかがえる。

このように、今回の活動を通して、学生は様々な面での学びが得られたことが推察される。

4. 専門演習における地域連携活動の意義と今後の課題

小林 田鶴子・田中 卓也

前項の感想にも示されているように、参加学生はこの活動に熱意をもって取り組んだ。教員が用意したものではなく、学生自らが企画立案し、構想を練る。学生にとっては面倒な準備・活動に思えるかも知れない。しかしながら、この面倒な経験こそが、現在の学生らが苦手としているコミュニケーション能力の向上や、リーダーシップの具備、協調性の構築につながるものであると感じている。ウォークラリーに竹楽器製作、流しそうめんの3本柱でこれまで活動してきたことも、すべて学生主導で行い、頭を突きあわて議論した終着点であった。このことは、2章で述べた、「本学学生はまさに『青少年指導員』の方々の役割を任されていることになる。もはや彼等は『ボランティア学生』ではなく、『活動支援員』ひいては『企画運営委員』としての重職を全うすることが求められているのである。」を改めて認識させるものであり、教育実習が学校での実習であることに対して、いわば地域活動での「実習」と位置付けることができるのではないだろうか。

2015年度の事前アンケートにおいて、「企画は楽しみであり、児童と関わることがい

まから待ち遠しい。けれども講義の一環にするのは抵抗がある」という回答が見られる。このことは学生等の自信のなさが明確に示されているといえる。その自信のなかった学生等が、実践してみると、学生感想文にもあるように、「成功に導けてよかった」、「児童とたくさん話げできた。コミュニケーションも十分取れるようになった」とか「最初は半信半疑の気持ちであったが、途中から前向きな気持ち全開で臨めた」と回答するように、自信に変わっている。やはり「経験こそ力」なりということなのであろう。経験することで、彼等はまた教師への階段を一步ずつ昇っているのである。そういう意味では社会人育成の視点からも、里山自然体験活動は彼等にとって有意義なものなのであるといえる。

冒頭にも掲げたように、専門演習の目的は卒業論文の作成であるが、論文はある意味で最終的な成果物であり、そこに至る過程でどのような経験をしたかが重要である。こうした実践的な活動は、それ自体が学生の血肉となり、その結果、卒業論文を書く場面においても説得力を持った文章が出てくるものと考ええる。今後もこの活動は継続の予定であるが、活動自体の発展もさることながら、卒業論文にどのように反映されているかについて、細かく検討していくことが望まれる。

5. おわりに

小 林 田鶴子

3章の感想文に掲載された、2014年度の4年女子学生は、卒業論文の中にこの活動を1つの大きな実践として取り上げている。そして、この学生は、卒業して現在さいたま市の臨任教員となっているが、2015年度の活動時に教員が連絡を入れたわけでも無かったが、ゼミの仲間から情報を得て、当日自主的に手伝いを買って出てきた。このことは、当該学生にとって、この活動がいかに大きな意味を持っているか、また、卒業後もかつてのゼミ生同士が交流していることをうかがわせるものである。

また、田中ゼミでも、この活動がきっかけとなって、現在宮代町の小学校で臨任教員となって勤務している卒業生がいることが示されたが、このことも、ゼミでの体験が将来の進路に大きな影響を与えていることを示すものである。

卒業論文は大学生活での総まとめであると同時に、社会に出てからの礎となるものでもある。その総まとめの時期にどんな学びをし、何を得たかが学生の将来を左右するといっても過言ではない。

そうした意味においても、専門演習の内容を今後も充実させる重要性を痛感する。

謝辞

本稿を執筆するにあたって、宮代町教育委員会教育推進課の小林知弘さん、榊井恵未さん、田中啓之さんに大変お世話になりました。また、さいたま緑のトラスト協会宮代支部

代表・八木橋孝雄さんにも活動の実施に当たって様々な助言を頂いたり、当日にお話をし
て頂いたりと色々お世話になりました。この場をかりて厚く御礼申し上げます。

注釈

- 1)「**「**電腦 みやしろ」(埼玉県宮代町公式ホームページ)。
- 2)「**「**広報誌みやしろ」(2011年11月22日号)。
- 3)「**「**電腦みやしろ」(2011年12月22日)。